雨はお嫌い？

きこりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雨はお嫌い？

【Ｎコード】
Ｎ５９４１Ｚ

【作者名】
きこりん

【あらすじ】
雨が降った。一般的に梅雨といわれる時期だからしょうがない。ところで、あなたは雨はお好き？ーーーーーー時期はずれているけれど、雨に対する色んな人の気持ちを描いてみました。一日の出来事を徒然と書いていきますので…。

登場人物紹介（前書き）

はじめまして　きこりん　です！！
これが初投稿作品となります

まだまだ拙い文章ですので、アドバイスなどいただけると嬉しいです。
それでは、よろしくお願いします。

登場人物紹介

雨が降った。一般的に梅雨と呼ばれる時期だからしょうがない。
ところで、あなたは雨の日は好きですか？
――――――
時期はずれているけれど、雨に対する色んな視点を描いてみた作品です。

おもな登場人物

【シーン：学校】

木本和哉　高１　男　このシーンでは彼中心に話が進む
志田幸平　高１　男　能天気
片木優香　高１　女　ショートヘアのさばさばした女の子
木月先輩　高２　男　和哉の部活の先輩

【シーン：少女】

黒髪の少女　名前未定、でもそんなに深い意味は無いです。

なお、彼らの名前は実在の人物とは一切関係ありません。
それでは、きこりん初の作品、のんびりですが進めて行こうと思います…。

【第一話】雨の日は歩き？（前書き）

はい！記念すべき（？）第一話です
今回は【シーン：学校】ですね。

【第一話】雨の日は歩き？

しっとりとした朝だった。
朝日もいつもより少なく、薄暗い。

「雨か。」

まだ温もりの残る布団から起き上がりつつ、今日は歩きだな、と思った。
晴れている日ならば、自転車で時間をかけずに登校できるのだが。
しかし雨の中歩くのも、不思議と嫌いになれない。

「早く支度しなさい。」

という、お母さんの声。かすかに香るお味噌の匂い。
外が夜のように薄暗くても、ちゃんと朝の時間は進んでいた。

――――――――――――

「おっはよー。チャリで来たからびしょびしょだよぉ」

クラス一能天気（だと思う）の志田幸平が髪から水滴を滴らせ、
屈託のない笑顔でいつものように話しかけてきた。

雨の中、無理やり自転車（チャリ）に乗ってくると、こうなる。
すると、服という服が雨を吸って、重い。あまり気持ちのいいもの

ではない。
これで一日過ごすのはさすがにきついだろう。
それでも幸平は笑顔。そういう奴だ。
幸平の笑顔は薄暗い雨の日でも、明るい。
教室は三階。湿度は高い。換気扇のかすかな音を聞きながら窓の外を眺めていると
不意に、目の前が明るくなる。
ドゴーン
他のクラスからも、周りからも女子のキャーッという声が上がる。
雷が、近くに落ちたみたいだ。
朝から盛大に雷を鳴らすなんて、空も忙しいな。
なんて、思っている自分が少しおかしく思える。
だが、雷は嫌いじゃない。薄暗い空に白い光の筋が入るのが見えると、わくわくする。
――このまま、一斉下校にならないかな。
そんなクラスメートの声とともに
木本和哉は始業のベルを聞いた。

【第一話】雨の日は歩き？（後書き）

一話目から風景描写に苦戦です＞＜；
人物像も固まらないし…
あ、木本君の名前、最後の最後に出ましたね…

とりあえず、続きは書いていきますので！

アドバイスなどありましたら遠慮なくお願いします＞（＿＿）＜

【第二話】雨の日の『世界』？（前書き）

【シーン：少女】です。短いです；；；
では、どうぞ

【第二話】雨の日の『世界』？

雨。五月雨。梅雨。

どれもいい響きだ。

なんたってしっとりと薄暗い、こんな幻想的な景色は雨の日以外には見られない。

あぁ、今日もいい日だ…

部屋の窓からしとしとと雨の降りしきる外を眺めながら、黒髪の少女は思う。

彼女の膝の上には髪と同じく黒い毛の猫。丸まってのんびりとした様子だ。

「ねぇ、こういう日こそ外に出てみたいと思わない？」

にゃぁ、と猫が鳴く。少女に答えるように。イエスかノーかは分からないが。

少女も外を眺めたまま独り言のように続けた。

「どうして世間一般とやらでは、雨の日は憂鬱だと決め込んでいるのかしら。

雨の日だからこそいつもと違う『世界』が見えるのに、ね」

うふふ、と微笑む。膝の上では相変わらず猫がくつろいでいた。
少女はそして思い立ったようにそっと猫を床におろし、音も無く
しかし楽しそうに部屋を出て行った。

【第二話】雨の日の『世界』？（後書き）

自分でも何が書きたいのか分からない。
はてさて、このお話はどこに向かっているのでしょう…？
迷走して、登場人物の気持ちだけ述べて、
終わりそうな予感です。（寧ろそうしようかな）

アドバイス、メッセージ、お待ちしてます＞（＿＿）＜

【第三話】雨の日は憂鬱？（前書き）

これが一般論かと思われる、第三話です
あくまで作者が一般論だと思い込んでいるだけですが…＾＾；

【シーン：学校】です

【第三話】雨の日は憂鬱？

「憂鬱よね」

「え？」

背後から突然声をかけられ、言葉の意味を理解できなかった和哉は気の抜けた声で振り返る。
そこにはクラスメートの片木優香が短い髪をかき上げながらこちらを見ていた。

「外見て何思ってたの？」

「ん、いや特に何も…片木こそどうしたんだ？」

「クラスでも二枚目に入るアンタが感傷に浸っている様子だったから、からかいに来たのよ」

「感傷って…俺は何も思ってねぇよ」

「あら、どうかしら」

こういうのは冗談であることは分かっている。なんたって片木の目がそれを物語っている。
さてどこからが冗談かって？
謙遜する訳ではないが二枚目と言うのも俺としては頷けないものだ。

「でも男子はいいわよね」

「いきなりなんだよ」

片木が俺の頭に手を伸ばしてきたので反射的によける。

「女子の髪には湿度は大敵なのよ。せっかくアイロンで整えたのに湿気でうねっちゃうんだもの」

「お前のその短さじゃ関係ない話だろ？」

「なによ、失礼ね…って言い返せないけど」

からかい返しに軽く言ってやると、片木はわざとらしくぺろっと舌をだし、おどけた。

でも、片木の最初の言葉…

「雨の日って憂鬱なのか？」

「憂鬱でしょ。木本はそうじゃないの？」

「いや、あまり憂鬱には思ったことない」

「へぇ、珍しい人もいるのね」

なんか感心した目で見られている気がする。そんなに珍しいか？
むしろ雨の日を憂鬱と言う方が俺にとっては不思議なんだが…。

そうか、少なくとも女子は憂鬱に感じているのか。
って、なんで俺は感心してるんだ。

自問自答を繰り返す。いや、ただのノリツッコミか。

【第三話】雨の日は憂鬱？（後書き）

さっそく訳が分からん…

とにかく、最後まで書いて

消す。

アドバイス、メッセージ、お待ちしてます＞（　）＜

【第四話】雨の日の匂い（前書き）

試験終わった！色んな意味で；；；

さて、小説のほうですが…

先に言います

今回も短いです

では【シーン：少女】どうぞ～…

【第四話】雨の日の匂い

戸をあけると胸いっぱいに広がる、アスファルトの濡れたにおい。
現代らしい雨の匂い。

まだ土の地面だった頃はこんな匂いじゃないんだろうな。

黒髪の少女はそんな事を思いながら
ならば土の匂いも感じに行こうかと森林公園の方向に足を向ける。

少女の足取りはそのまっすぐな黒髪のように迷いは無い。
しかしやはり楽しげに歩いて行く。

黒字に白い水玉の傘、水滴をはじいて光るような黒のレインブーツ。

彼女の周りは黒で溢れている。
だがそのどれもが優しい黒。

【第四話】雨の日の匂い（後書き）

まさに　イミフ　とか言うものですかね

とっとと終わらせようか。予定ではあと四話ほど必要ですね…

こんなきこりんですが

アドバイス、メッセージお待ちしています＞（＿　＿）＜

【第五話】雨の日は泥まみれ？（前書き）

「セッションがタイムアウトしました」という警告に阻まれこれが４回目のチャレンジ…

もはや警告の言葉の意味が理解できずにいます。うぬぅ…

とにかく【シーン：学校】どうぞ；

【第五話】雨の日は泥まみれ？

放課後
まだ降ってはいるが幾分小降りになった雨を眺めながら、和哉は部室へと向かっていた。
サッカー部に入ったばかりである和哉は、まだレギュラーではない。だが練習は当たり前のように毎日ある。

「今日はトレーニングかな」

そう、残念そうにつぶやく。
雨により緩くなった土の地面は、走りまわればたちまちでこぼこ。自分たちも泥まみれになる。そのため、たいていの運動部は雨が降ると校内でトレーニングとなるのだ。

「泥んこも楽しいのに」

「それが許されるのも幼稚園児までってな」

「木月先輩っ！？」

部室の扉をあけると、中から先輩の声が飛んできた。「泥んこも～」は気付かないうちに口をついて出ていたらしい。別に聞かれても悪いことではない。ただ、驚いたのはすでに、俺が一番乗りだと思っていたそこに人がいたことで…
部室に入ったとたんに広がる独特の匂いを感じながら俺がカバンを下ろすと、笑顔の先輩は言葉を続ける。

「おまえも面白いこと言うよな。高校生にもなって泥んこなんて、俺だったら母親に叱られるからこりごりだな」

「まぁ…確かに」

「その『確かに』はどっちへの確かに、だよ」

曖昧に返事をすると、先輩はクックと楽しげに話を突っ込む。その意味が分からず「どっち？」と単語で聞き返す。

「木本（おまえ）の発言が面白いのか、母親に叱られる事か」

あぁ、なるほど。でもそういう先輩の視点も面白いと思うが…そう思いつつ当たり前のように（当たり前なのだが）「そりゃ叱られる方ですよ」と答える。すると先輩はさも驚いたような顔をして見せた。

「何だ、おまえの発言の面白さは天然ものだったのか」

「何ですかそれ」

「だって木本さ、たまーに不思議ちゃん発言すんじゃん？」

不思議ちゃん…？

「…記憶にございません」

冗談めかして言うが、本当に『不思議ちゃん発言』とやらに心当たりがない。

うーん、と俺が首をひねっていると「それそれ」と先輩は笑いを堪

えていた

「でも俺はそういう個性、大事だと思うぜ」

そう言いつつ、何とか笑いを堪えた先輩は「トレーニング行くぞ」と振り返りながら部室を出て行った。その肩はまだ微かに震えていたが

「…俺って不思議ちゃんだったか？」

一人残った部室、窓の外にはまた強くなり始めた雨。

和哉の口からこぼれ落ちた疑問は、その雨音にかき消された

【第五話】雨の日は泥まみれ？（後書き）

…終わり方微妙でごめんなさい
そして、和哉君が不思議ちゃんにされたのは
私の中でのキャラ設定が曖昧なせいでして…申し訳ありません＜＞；

余談ですが、木月先輩の「その『確かに』はどっちへの確かに、だよ」という台詞は、素の私の気持ちだったりします。

そろそろ終わらせるつもりですが
質問、意見などありましたら喜んで受け付けますので＞（＿＿）＜

【第六話】雨の日の出会い（前書き）

とうとう書き溜めていたものも無くなりました・・・

【シーン：少女】どうぞ

【第六話】雨の日の出会い

森林公園までの道のりの途中に、商店街がある。
それほど大規模なところではないが、活気のある通りだ。
黒髪の少女はそこで少し歩みを遅くして、見慣れた街並みを眺める。
今日も八百屋のおばちゃんは元気よく声を張り上げているし、魚屋のおじちゃんも威勢のいい声で道行く客に声をかけていた。
雨の日でも変わらない風景。
途中の裏路地にはえさを求めて猫がたむろし、学校帰りの小学生は明るい黄色の合羽をまとって少女のわきを走りぬけていく。
ふと目の端で手招きする人をとらえ、少女はそちらに顔を向ける。
そこにあった、通いなれたパン屋のガラス窓の向こうで女の人が少女に向かって「いらっしゃい」と伝えていた。

カラン、と明るいベルの音と共にパン屋に足を踏み入れると、そこは外の雨の匂いから一変して焼きたての幸せなパンの匂いであふれかえっていた。

「そろそろかなって思ってたの」

笑顔でパン屋の女主人は少女に言う。雨の日になると毎日のようにこの店の前を通る少女は、この店の常連となっていた。通りに面したガラス窓から見える、こんがりと焼き上げられたパンに誘われるように入ったのが、この店と気さくな女主人との出会いだった。

「はい、これ」

そう言ってカウンターの向こうから差し出された袋の一つにはラス

ク、もう一つにはパンの耳が入っていた。猫の餌としてパンの耳を買ったこともあり、それから少女のためにいくつか取っておいてくれるようになっていた。

「いつも、ありがとうございます」

ぺこり、と頭を下げ財布を取り出そうとすると「お代はいいのよ」と止められる。

「いつも買ってくれてるお礼。それにそのラスク、新作なの」

よかったら感想ちょうだい、その言葉と手元のラスクを見比べるように少女は女主人の顔を見て「今頂いても良いですか？」と尋ねる。袋の中のラスクは、今も周りに並んでいるこの店のパンと同じように幸せそうな香りを放っているように思えた。

「ええ、ぜひ」

「いただきます」

袋から一枚を取り出しかじるとラスクはサクッと音を軽い音を立て、口の中には上にかかったシュガーの、ほんのりとした甘さが広がる。思わず、顔がほころぶ。

「おいしい」

つぶやくように言って、手に残ったかけらを口に含む。女主人はにこにこと幸せそうにラスクを食べる少女を見つめていた。ごくん、とラスクを飲み込んだ少女は改めて女主人に向き直り「おいしいです」と、伝えた。

「良かった。涼ちゃんがおいしそうに食べてくれるから、私も作った甲斐があるわ」

黒髪の少女――もとい、涼ちゃんと呼ばれた少女は嬉しそうな女主人の顔を見て、見つけた、と思った。

「ごちそうさまでした」と、またぺこりと頭を下げ、もと来た扉を押し開ける。カラン、という明るいベルの音と「また来てね」と言う女主人の気さくな声のハーモニーに耳を傾けながら

「雨の日の新しい『世界』、見つけた」

と、ラスクとパンの耳の袋を大切そうに握り締めながらつぶやいた。

雨は小降りになり始め、空にはうっすらと虹がかかっていた。

【第六話】雨の日の出会い（後書き）

質問、意見ありましたら喜んでお受けいたします＞（　）＜

【最終話】雨上がりの森（前書き）

とうとう年末です！早かったな、２０１１年は…

どうやらこの小説の中の一日も終わりそうです

それでは【シーン：学校】どうぞ

【最終話】雨上がりの森

雨上がりの夕焼け空は、きれいに真っ赤に染まっていた。

結局あの後木月先輩には何も言われず、『不思議ちゃん発言』というものにも思い当るところは無いままになってしまった。まあいいか、と靴を取り出しトサッと下に落とす。明日覚えてれば幸平あたりに聞いてみよう。

部活も終わり一人帰路についた和哉は雨上がりの空を見上げてふと、森林公園まで行ってみようかと思う。まだ日も暮れ始めだから、少しくらいのより道は問題ない。それに…

「雨降ってたしな」

そう呟いて、家への道から少しそれて歩きだす。道端にたまった水たまりには、空の赤が映っていた。

――――――

森に踏み入る。学校からそれほど離れていないため、公園についてもまだ空は赤かった。舗装されたコンクリートの道を歩いて森の奥へと行く。それとなく香る、雨にぬれた土の匂いに懐かしさを感じる。

長くは歩いていないが、見慣れた大木の前で立ち止まりひとつ伸びをする。んーっ、と森の澄んだ空気を感じた和哉は人の気配に気づ

く。

「やっぱり来てたか」

大木の反対側にぐるりと回ってみると、黒髪の少女が大木の根元にしゃがんでいた。少女はそこに一本咲いた花を、笑顔で眺めていた。

「この子前に来た時はいなかったのに、すごいよね」

そう言って少女はぴょこんと立ち上がり和哉を見上げる。和哉より頭一つとちょっと小さいため、自然とそうなるのだ。

「ただいま、涼」

そう言って和哉は少女――涼の頭をポンポンとなでる。

「おかえり、お兄ちゃん」

えへへ、と照れたように涼は笑い、「そうだ」と手に持っていたラスクの袋を差し出す。

「おいしいよ、一緒に食べよう？」

「良いのか？」

「うん」

二人でラスクをかじる。サクッという軽い音がしっとりとした空気に溶ける。

「雨の日は毎日来てるんだな」

和哉が森の奥を眺めながら言う。「うん」と涼はうなずく。

「雨の日にしか会えない『世界』を見つけに来るの」

今日もほら、ラスクとお花に出会えた。と、やさしい笑顔でまた足元の一輪の花に目を向ける。和哉も花を見る。黄色い花を可憐にしかし精一杯咲かせているその花は、とてもかわいらしい。

「次来た時には、増えてると良いな」

つぶやいて木々の隙間から見える空を見上げると、すでに赤みは消えて暗くなり始めていた。「帰るぞ」と涼の手をとり、和哉は涼に合わせるようにゆっくりと歩きだす。

雨の後のしっとりとした森の空気は、今も二人をやさしく包むようだ。森の空気は良い。また来よう、いつものようにそう思う。

「…なあ、俺って不思議ちゃんか？」

「ん？私にとっては優しいお兄ちゃんだよ」

「そっか」

優しい笑み。お兄ちゃんと歩く帰り道。雨の日に会える『世界』

落ち着く空気。涼妹と歩く帰り道。雨の日が嫌じゃない理由。

【最終話】雨上がりの森（後書き）

なんだかふわふわした終わり方になってしまいました；；
そして、またキャラ設定の雑さが…
少女の性格（雰囲気？）が最初と変わってしまった気がする。

ここまで読んでくださった方、本当にありがとうございます！＞（＿＿）＜

続きや番外編、などの希望があったら書こうかな…なんてある訳ないか＾＾；
それでは、「雨はお嫌い？」を読んでくださり、ありがとうございました

（質問、ご意見は喜んで受け付けます）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5941z/

雨はお嫌い？

2011年12月28日22時45分発行